

## 研究主題

### 授業研究における教師の省察 —事後協議会における語りの分析を中心に—

**要約：**本研究では、授業研究における教師の省察について明らかにすることを目的としている。そのために、研究授業および小学校における校内での授業研究後の事後協議会に着目し、教師の語りを分析した。第一章では、筆者自身の省察を取り上げて、研究授業への参加者が他者の授業を一体どのような視点で見ようとしているのか、そしてどのように自身の省察へとつなげようとしているのかを考察した。第二章では、ある小学校での校内研究会に焦点を当て、事後協議会における教師の語りの分析を通して、教師集団内でどのような関わりがなされ、教員としての資質・能力の向上へとつながっていくのかについて考察した。第三章では、初任教師の意識の変容を事後協議会後のインタビューでの語りから読み取り、教職経験の少ない若手教師が、どのような意識で他者の研究授業を参観し、事後協議会に臨んでいるのか、そして校内研究会の場が初任教師の資質・能力の向上にどのような効果をもたらしているのかについて考察した。研究全体を通して、「反省的実践家」としての教師に一步近づくための1つの方策として、学校組織内における「“異”から学ぶ」必要性を確認することができた。一方、事後協議会での教師の語りの特徴が校外の研究会においても見られるかどうかの検討、教師の意識に変容をもたらす要因にまで迫ることの2点が今後の課題として残った。

**キーワード：**省察、反省的実践家、授業研究、資質・能力、校内研究会、初任教師

## 序章

本研究では、授業研究における教師の省察について明らかにすることを目的としている。この目的を遂行するために、研究授業および小学校における校内での授業研究後の事後協議会に着目し、教師の語りを分析した。

我が国における授業研究の歴史は長く、その起源は1920年代までさかのぼることができる。その後、社会の変化および教育改革のうねりの中で、様々な変遷を遂げていくが、学校現場の教師の授業研究に取り組む情熱、飽くなき探究心は一貫して変わることなく連綿と受け継がれてきた。近年、その取り組みがJugyo Kenkyu (Lesson Study) の名のもとに国際的にも注目されるようになったことは特筆すべき点である。

一方、文部科学省中央教育審議会答申には、「教員に求められる資質能力」が示され、その能力を向上させるべく「学び続ける教員像の確立」が求められている。

今後、新たな知識や技術が求められ、その活用

によって進歩・変化のスピードが加速度的に進んでいく社会、そして、教員の大量退職・大量採用による、知識・技能の伝達の困難さが生じるとされる学校現場の状況を鑑みると、授業研究が教員の資質・能力向上の要としてますます重要視されていくことは想像に難くない。そこで、本論文では、「授業研究における教師の省察」に着目した。

教師自身にとって学び多き、実りある授業研究にしていくために、「省察」という視点は欠かせない。

「省察」に関して、具体例として度々取り上げられるのは、ドナルド・A・ショーンが提起する「反省的実践家(reflective practitioner)」モデルである。「技術的熟達者(technical expert)」モデルに対比して示されるこのモデルは、「行為の中の省察(reflection in action)」にもとづく。行為の中で省察する時、すでに確定した理論や技術のカテゴリーに頼るのではなく、独自の事例についての新たな理論を構成しようとする者が、「反省的実践家」であり、複雑且つ複合

的な要因を多分に含む授業の中において、反省的に自らの思考の枠組みを変えていくことによって、子どもの側に立ちつつ専門的な力量を形成しようとする教師が「反省的実践家」であるといえる。

今後ますます予測困難を極める社会情勢の只中で、自己を確立し、強く逞しく生きていかなければならない子ども達を育成する立場にある教師が省察を行うことは、まさに必要不可欠な専門性であると思われる。

そこで本論文では、研究授業および事後協議会に着目し、教師がどのような視点で授業を参観し、議論し、自身の省察へとつなげていこうとするのかを明らかにすることを試みた。そこで、以下の3つの課題を設定した。

1. 研究授業への参加者は、他者の授業をどのような視点で参観し、どのように自分自身の省察へとつなげているのか
2. 研究授業後に行われる協議会では、教師たちはどのような省察を行い、どのような議論が行われているのか
3. 研究授業と協議会での議論は、一人の教師の資質・能力の向上へとどのようにつながっているのか

## 第一章 一参加者として授業で「何を見た」のか

本章では、筆者自身の省察を取り上げて、研究授業への参加者が他者の授業を一体どのような視点で見ようとしているのか、そしてどのように自身の省察へとつなげようとしているのかを考察した。

他者の授業を参観する際には、目の前で繰り広げられる事実をありのままに記録し、その事実の裏にある授業者および学習者の意図や思い、願いを推察することが参観者としての必須条件である。そしてその積み重ねが、教員の資質・能力の向上につながると考える。そこで本章では、平成27年度に筆者が参観した授業の内、4つの研究授業を取り上げ、一実践者である筆者が、自身の主観や感情を持ち込みながら感じ、考えた教育実践

者としての息づかいをそのまま記した。さらに、授業の参観中の視点について、より詳細に且つ包括的に考察した。

その結果、「異校種」「異教科」「異(他)地域」の授業から学ぶ意義を感じた。それは「授業は“異”なれど、子どもは“同”じ」ということである。高等学校の事後協議会に参加した際、これまで参加してきた小学校の協議会と同じ雰囲気を感じた。それは、校種の違いによる子どもの成長・発達段階の差はあっても、教師として子どもをありのままに見取り、その成長を願うという共通の認識を、協議会の場で感じたからだと思われる。今回の授業では、小学校と比べて遥かに高度で専門的な内容を学習しているにも関わらず、生徒間の一連のやり取りは、小学校の授業においてもよく見られる光景であった。彼らのやり取りは同じ学級の仲間同士の関係性、つまり「横のつながり」である。また一方で、彼らも数年前は小学生や中学生として授業を受けてきており、その積み上げがこの授業の中に現れていることも感じた。つまり「縦のつながり」である。目の前の子ども達を、この横と縦のつながりで捉えながら授業を見ていくと、自分にとって異なる授業であっても、子どもを介した共通性が見えてくる。そこにこそ、自分の専門外の授業から学び得るものがあるのではないかと思われる。

これまで培ってきた専門性や技術、価値観が違うからこそ、授業を子どもの目線で純粋に、且つ新鮮に見ることができると、「異から学ぶことの意義」を確認できた。

## 第二章 事後協議会における語りの分析

本章では、ある小学校での一年間の校内研究会に焦点を当て、事後協議会における教師の語りを分析した。その分析を通して、教師集団内でどのような関わりがなされ、教員としての資質能力の向上へとつながっていくのかについて考察した。

調査方法は次の通りである。金沢市立E小学校において平成27年度の一年間に実施された校内研究会の内、4つの研究会について、研究授業お

よび事後協議会の様子をビデオとICレコーダーで収録し、事後協議会での参加者の全ての発言を逐語記録に記した。そして全発言を3つのカテゴリー（「教師・教授方法・教具」「教科・教材」「子ども・学習活動」）に分類し、発言内容毎に小見出しをつけた。最後に協議の内容によって場面分けをし、協議会全体の協議内容の構成を捉えた。それらの分析を通して、各協議会の傾向を読み取ると共に、研究対象の教科や協議形式の違う事後協議会を比較することを通して、校内研究会での教師の省察について考察を試みた。

	第3学年算数科 全体研究会	第6学年社会科 全体研究会	第6学年社会科 学年研究会	第2学年国語科 全体研究会
日時	5月20日	6月30日	9月28日	11月16日
参加人数(指導・ 助言者を含む)	30名	31名	7名	33名
主な協議形態	全員	全員	全員	グループ
協議時間	約70分	約60分	約45分	約90分
総発言数	66回(0.9回/分)	50回(0.8回/分)	91回(2回/分)	157回(1.7回/分)
教師・教授方法・ 教具	35回(53%)	24回(48%)	40回(44%)	76回(48%)
教科・教材	9回(14%)	5回(10%)	12回(13%)	6回(4%)
子ども・学習活動	9回(14%)	6回(12%)	30回(33%)	56回(36%)

その結果、次の2点について明らかとなった。1点目は、子どもを介した省察についてである。各事後協議会での教師の語りの分析を通して、次の点について確認した。

- 参観者の「偶発的」「無意図的」な子どもの見取りによって協議が深まった。
- 授業者の子どもの見取り方についての協議から、継続性のある指導の大切さに迫っていた。
- 協議会で出された具体的な子どもの姿から、授業者自身の内省へとつなげていた。
- 授業中の気になる子どもの姿に関する協議によって、議論が深まった。

以上の点を踏まえ、研究授業において教師は、常に子どもの姿をつぶさに観察し、表面上に現れる言動だけでなく、分からなやさや迷い、悩みといった子どもの内面まで理解しようとしていることが分かった。さらに注目すべきは、観察の視点が予め決められたものではないからこそ、深い気づきにまで至ることがあったという点である。そこには、各教師のこれまでの経験に裏打ちされた子どもを見取る視点があり、各教師が現在関わっている子ども達の姿を頭に思い描きながら他者の授業を参観しているからであると思われる。ここに、校内研究会のもたらす効果の1つがある

と考えられる。

2点目は、それぞれの立場の違いによる協議を通して、新たな方向性が生まれたことである。分析を通して、次の点について確認した。

- 学校全体での共通実践・共通指導をめぐる議論の中から、学校研究の捉え方の相違が見えた。
- 異学年担当という客観的な立場からの発言により、当事者が今後の指導の方向性を見つめ直すよい機会となった。
- 担当学年の違う教師の発言から、「子どもの変化・成長の足跡」と「学年を越えた共通の取り組み」という2つの時間軸による共通認識がなされた。

以上の点から、校内研究会では、立場の違う教師同士がそれぞれの立場で意見を交わすことによって、新たな研究の方向性や子どもの見取りが生まれることが分かった。また、第一章でも述べた「異から学ぶことの意義」も踏まえると、校内研究会の場において共感的なスタンスで聴き合う関係の構築が重要であるといえる。

### 第三章 初任者の意識の変容を事後協議会の語りから読み取る

本章では、教職経験の少ない若手教師が、どのような意識で同僚教師の研究授業を参観し、事後協議会に臨んでいるのか、また一年間の校内研究会に参加することで、どのような意識の変容が見られるのかについて考察を試みた。そして校内研究会の場が初任教師の資質能力の向上にどのような効果をもたらしているのかについて考察した。

調査方法は次の通りである。第二章で取り上げた金沢市立E小学校に平成28年度より初任者として勤務するA教諭を対象にインタビュー調査を実施した。A教諭へのインタビューは事後協議会の直後に行い、「授業で一番心に残っていること」と「事後協議会で一番心に残ったこと」の2点について質問した。今回は、平成28年度にE小学校において行われた校内研究会の内、4つの研

研究会について取り上げ、A教諭へのインタビューを行った。

その結果、初任者は自身のこれまでの経験を踏まえ、現在抱える悩み等を念頭に置きながら、他者の授業を参観し、協議会に臨んでいることが明らかとなった。また、初任者自身の授業づくりや学級経営に関する一貫した問題意識を持ちながら授業研究に参加し、その授業研究を通してその変容が起こっていることも確認できた。

不安や悩みと抱えながら日々子ども達と向き合い、授業づくりや学級経営に励むA教諭にとって、定期的に行われる校内研究会の場が、教師としてどのような授業をしたいかという自身の実践の指標づくりの場であり、さらに、その指標を実践しようとする意欲を高める場となっていることが、今回の調査を通して明らかとなった。

## 終章

本研究では、「授業研究における教師の省察」について明らかにすることを目的としていた。そのために、研究授業および小学校における校内での事後協議会に着目し、教師の語りの分析を中心にを行い、検討した。

本研究で明らかになったことの中でも、特に印象深かったのは、同じ組織に属する者同士で行う校内研究会の事後協議会において、異なる関係性の中から新たな学びが生じていた点である。例えば、各参観者によって異なる子どもの見取り、学校組織内での異なる立場からの授業や学校研究への見解等である。「反省的実践家」としての教師に一步近づくための1つの方策として、学校組織内における「異」から学ぶ」必要性が、本研究を通して確認できたと言える。

一方、今後の課題として、次の2点が挙げられる。第一に、分析を通して明らかになった事後協議会での教師の語りの特徴が、校外の研究会においても見られるかどうかの検討である。教科研究を主目的とする研究会や、他校の教師が参観する公開研究会等、学校組織としての同質性のないメンバーによる事後協議会においても同様の分析

を行い、今回の研究結果と比較することで、研究会に臨む教師の意識と語りの相関関係が明らかになるものと思われる。

第二に、教師の意識に変容をもたらす要因にまで迫ることである。本研究では、初任教師の語りを分析するにあたって、この教師の担当する学級の状況や初任者研修の進捗状況、また、同僚教師との関係性やこれまでの経験知の調査等を詳細に把握することはできなかった。こうした背景をふまえることで、より深く語りの意味が見えてくるだろう。併せて、初任教師の2年目以降の状況も追跡調査していくことで、過去に遡って、初任当時の語りの背景を検討することが可能になるものと思われる。

## 主な参考・引用文献

- ・秋田喜代美・キャサリンルイス編『授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない』明石書店、2008年。
- ・稲垣忠彦・佐藤学『授業研究入門』岩波書店、1996年。
- ・遠藤貴広「教師の同僚性」、『指導と評価』、2012年。
- ・鹿毛雅治「授業中に何をどのように観るのか ―その意図と解釈の枠組み―」、『日本教育方法学会第15回研究集会報告書』2011年。
- ・北俊夫・向山行雄『新・社会科授業研究の進め方ハンドブック』明治図書、2014年。
- ・G.ウィギンズ・J.マクタイ、西岡加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計 ―「逆向き設計」の理論と方法』日本標準、2012年。
- ・斎藤喜博『教師の仕事と技術』国土社、1990年。
- ・佐藤雅彰・齊藤英介『子どもと教室の事実から学ぶ 「学びの共同体」の学校改革と省察』ぎょうせい、2015年。
- ・社会科の初志をつらぬく会編『生き方が育つ教育へ』黎明書房、2008年。
- ・武田常夫『真の授業者をめざして』国土社、1990年。
- ・田中耕治編『よくわかる授業論』ミネルヴァ書房、2007年。
- ・田中耕治・鶴田清司・橋本美保・藤森宣之『新しい時代の教育方法』有斐閣アルマ、2012年。
- ・千々布敏弥編『結果が出る 小・中OJT実践プラン20+9』教育開発研究所、2015年。
- ・恒吉宏典・深澤広明編『授業研究 重要用語300の基礎知識』明治図書、1999年。
- ・ドナルド・A・ショーン、柳沢昌一・三輪健二監訳『省察的実践とは何か―プロフェッショナルの行為と思考―』鳳書房、2007年。
- ・日本教育方法学会編『授業研究と校内研修 教師の成長と学校づくりのために』図書文化、2014年。
- ・日本教育方法学会編『日本の授業研究 上巻 授業研究の歴史と教師教育』学文社、2009年。
- ・的場正美・柴田好章編『授業研究と授業の創造』溪水社、2013年。
- ・溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、2014年。

